

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十九卷 第三・四號

《社會經濟史特集》

ヤスパースの歴史意識……………出口 勇 藏

フォイエルバッハと市民革命（一）……………平 井 俊 彦

ケネー學說における政策的背景（一）……………菱 山 泉

プロシヤ農業變革についての一考察……………山 口 和 男

伏見酒造業の發達……………井 上 洋 一 郎

クリストファー・ヒル編

『イギリス革命——一六四〇年』……………河 野 健 二

昭和二十七年三月

フオイエルバッハと市民革命 (一)

——「三月前期」におけるドイツ精神史の潮流——

平井俊彦

Einst ist nicht Jetzt.

Sonst war die Religion, ich gesteh's, die Stütze des Staates; Aber jetzt ist der Staat Stütze der Religion.

Zeitgenässer Fortschritt.

Schon wird der Glaube sogar uns gemacht zu einem Gesetze; Bald ist des Staats Polizei Basis der Theologie.

(Satirischtheologische Disquisition. S. W. I. S. 368)

—— I. Feuerbach ——

一 問題の提起——フオイエルバッハの歴史的課題

「神學の祕密は人間學である。」—— Das Geheimnis der Theologie ist die Anthropologie. —— フオイエルバッハの宗教批判の根本命題はこれであつた。¹⁾すなわち神の假象性のうちに否定された人間の本質を回復し、本然の姿において確立すること、このことを尊い人類の使命であり、近代の課題であつた。「近世の課題は、神の現實化と人間化 *Verwirklichung und Vernenschlichung Gottes* —— 神學の人間學への轉化と解消 *Verwandlung*

und Auflösung der Theologie in die Anthropologie とびあつた。」³⁾従つてフォイエルバッハの哲學の系譜は、はるか近代思想の曙光であつた宗教改革にその起源を持つてゐる。だが、ルッターから始まる近代キリスト教神學、あるいはスピノザに端初をもつ近世ドイツ思辨哲學の系列は、なるほど中世的神の世界から人間を奪回し、近代的人間像を確立したが、その人間像は自然ないし物質から切斷された理性的本質としてのそれではない。⁴⁾従つて「神の人間化」は、神の理性への轉化ではない。かくては人間は、その疎外から回復されるのではなくて、再び理性によつて神化され、それが近代的に合理化されているにすぎない。我々はその典型的形姿を「近世哲學の完成者」ヘーゲルの絶對哲學に見出すことができる。「神を理性に轉化することは神を廢棄しないで、むしろただ神を轉置したにすぎない。と同様にプロテスタンチズムは法皇を移して國王となしたにすぎない。」⁵⁾従つてプロテスタンチズムおよびドイツ觀念論哲學の系流は、中世ローマ法皇を否定してドイツ專制主義を打ち出したにすぎない。

ところでドイツ市民革命（一八四八年）は、ドイツ專制主義を打ち倒して民主主義を斗い取らなければならない。すなわち專制君主制をブルジョアの民主主義に解消しなければならない。この課題は「人間を、神學者から人間學者に、愛神者から汎愛者に、彼岸の候補者から此岸の研究者に、天上および地上の君主政體と貴族政治の宗教的および政治的侍女から地上の自由な自己意識を持つ市民とすること」によつて達せられる。⁶⁾従つて「新しい哲學は、ヘーゲル哲學の一般に從來の哲學の實現である。しかし、同時にこのものの否定、しかも矛盾なき否定であるところの一つの實現である。」⁷⁾「神の人間化・現實化」は、「理性における神學の解消であるばかりでなく、また心臓における、簡單にいえば、人間の全體的・現實的本質における解消」でなければからぬ。⁸⁾かくて、「新

しい哲學は、近世の課題である「神學の人間學への解消」を「完全な・絶對的な・矛盾のない解消」とすることが出来る。そしてこのことこそ、ドイツ・ブルジョア民主主義革命＝三月革命において、念進的小市民フオイエルバツハに與えられた歴史の課題であらう。このようなフオイエルバツハの宗教批判の歴史的地位付けを、もう少し精密にドイツ近代の社會構造、殊に三月前期におけるそれに照して説明しよう。

(1) L. Feuerbach, Vorläuge Thesen zur Reform der Philosophie. 1842. Sämtliche Werke II. S. 222.
 "Das Gehirn der Theologie ist die Anthropologie."

(2) L. Feuerbach, Grundsätze der Philosophie der Zukunft. 1843. S. W. II. S. 245.

(3) L. Feuerbach, *ibid.* S. 245.

「この人間化の宗教的、あるいは實踐的仕方が新教であつた。人間であるところのその神、それ故に人間のなる神、キリスト——こののみが新教の神である。」

島田豊「人間學的唯物論の構造」五〇頁、理論第三卷第十一號、一九四九年「フオイエルバツハの人間學的唯物論は、その系譜的起源をはるかに宗教改革にもつ。」

* 近代思想の曙光——「人間の神學からの解放」——に關して、W. Dilthey, G. S. Bd. II. を見よ。邦文獻として、「社會史的思想史」に所載されてゐる羽仁五郎「近世」がある。

なお、ここで近代的思想の曙光たる宗教改革は、封建的生産關係のクリーゼの思想的表現であるが「ドイツにおいては、宗教改革は必ずしも進歩的の基礎になつて行われたのではない。」本多謙三「現代」——社會的思想史——二四九頁

(4) L. Feuerbach, *ibid.* S. 246. 「思辨哲學の本質は、合理化され・實現され・現在的にされた神の本質・に外ならない。」

(5) L. Feuerbach, Vorlesungen über das Wesen der Religion. 1851. S. W. VIII. SS. 28—9.

(6) L. Feuerbach, Philosophie der Zukunft. S. W. II. S. 274.

(7) L. Feuerbach, *ibid.* S. 316.

この點に關しても、先に掲げた島田氏の簡潔な指摘を参照。

Nachgelassene Aphorismen. S. W. X. 「法と國家」思惟の領域上におつての、神學の人間學への解消は、實踐の、生活の領域上におつては、王制の共和制への解消である。」

二 三月前期におけるフォイエェルバッハの宗教批判の課題

封建的危機であつた農民戦争がドイツでは最も大規模に戦われたにも拘らず、その敗北は、東西ドイツの對立、しかも東エルベに代表される再版農奴制の勝利を結果し、ドイツ市民社會の發展構造——上からの近代化の途——を内在的に規定し、領邦的絶對主義への傾斜を持つ。既に西歐諸國において古典的市民革命を経、さらに、殊に資本主義的先進國イギリスでは、産業革命に終末をつけんとしていた一八三〇年頃において、ドイツでは封建的なユンカー階級にその基礎をおいた領邦的絶對主義の下に、社會はまだ呻吟していた。この過程はドイツにおける宗教改革が必ずしも進歩的地盤の上で行われたものではなく、中世的な神の人間化——カトリックからプロテスタンチズムへの轉化——は、法皇權力から絶對主義權力への轉化であつたことに照應している。このような現實のブルジョア關係の發展の停滞によつて、ドイツ思辨哲學は「感覺的確實さ」を持たず、僅かに西歐の啓蒙主義の人間像を觀念的に描いたにすぎない。従つてこれらの理性はローマ法皇の代りにドイツの絶對主義權力を基礎付けたに止まつた。「啓蒙的專制」の下におけるドイツ觀念論哲學の系流は、すべてこの理性の傳統に立つ。従つて元來市民革命のイデオロギーの擔い手であるべきブルジョアジーの現實の全體的な人間像を描くことができず、知識階級として觀念的のみ西歐の市民革命に單なるデユスチャーを振りまくことが、彼らのなしうる限

界であつた。²⁴⁾このようなドイツ近代思想の運命は、ドイツ近代思想の綜合者ヘーゲルにおいて完成された。ヘーゲルの思想體系は、後に詳細さるべきように、このような近代觀念論の辿るべき必然的な歸結だつたのである。だが歴史は立ち止まることを許さぬ。ひとたび形成され、ヘーゲルにおいて完結されたドイツ觀念論體系は、さらに歴史の進行過程において新たな歴史意識によつて審判されなければならない。一八三一年のヘーゲルの死を以て完結するドイツ古典哲學の終焉は、ドイツ近代思潮の吊鐘であつた。封建的土地所有の壓倒的な重壓にも拘らず、ナポレオン衝撃によつてマニユファクチャー工業資本が開花し、ライン地方を中心に餘々に成長する。他方東エルベに展開する強固なグロツヘルシャフトも、シュタインハルデンベルクの農民解放を基軸として、ユンカー的ではあれ、近代化への適應の態勢を整える。このようなブルジョア關係の成育は、除々にではあれ、保護關稅・關稅同盟(一八三四年)を中心とする國內市場の形成をみる。成熟しつつあるブルジョアジーは、最早ドイツ・スタトウス・クオに安任することはできない。従つて究極的にはプロイセン國家權力との妥協でしかない古典哲學を、そのままの形では最早自己のイデオロギーとすることはできない。ブルジョアジーは自ら新しい市民意識を育て上げ、市民革命へと前進を始めなければならない。いいかえれば、ブルジョアジーに對して持つ古典哲學の限界を自覺し、それを超えねばならない。ヘーゲルの死、さらには七月革命あるいはヨーロッパの民族獨立運動を契機とするメッテルニツヒ體制の衰退は、ブルジョアジーの市民意識を育て上げるに絶好の機會であつた。

とはいへ、歴史を推し進めるには多大の困難と障礙がその前途をはばんでいる。三月前期におけるドイツ近代化の途は、あくまで土地所有が資本を把握する——上からの近代化として運命付けられていた。封建的土地所有

は、自らを近代化に適應せしめ、このことは自生的なブルジョアジーの發展を阻止する要因となつた。これに對抗して行くには、未だブルジョアジーの力は餘りにも弱い。「ドイツのブルジョアジーは、富力の點でも、集中度でも、フランスまたはイギリスのブルジョアジーに遠く及ばなかつた。」ここにメツテルニツヒの反動的政治體制こそは、正にブルジョアの進化を抑壓して、自らの指導の下に近代化に適應しようとする封建的土地所有者階級の依據する政治體制となつた。この反動體制はすでに衰退しつつあつたとはいえ、三月前期にはブルジョアの發展をみてより、反動化し、あらゆる方策を用いてブルジョアの運動を阻止した。ドイツのブルジョアジーは三月革命を控えてこのメツテルニツヒの強固な反動體制に對せねばならなかつた。

先づこの強固な専制主義に對するブルジョアジーの決戦は、イデオロギーの上で開始された。「當時は、政治とはといえば、荆棘だらけの原野だつたので、勢い主要斗争は宗教に向けられた。」その上、反動體制は官僚國家の中樞を占めていた僧侶階級のキリスト教的イデオロギーをその精神的支柱として、ブルジョアの自由主義的反對派に對していた。「宗教は、さらぬだにドイツ哲學のイデオロギー的精神的方向に適應してゐたように、ドイツ専制主義のイデオロギー的附隨現象であつた。」従つてその封建的諸關係を打ち破るためには、それと堅く結合し、かつその上に立つてゐるキリスト教神學および思辨哲學を破壊しなければならぬ。「宗教の批判こそは、一切の批判の前提をなすものである。」ドイツでは、「宗教は、當時では政治を動かす唯一の具である。」かくして三月前期において、ドイツ・スタトウス・クオ批判はその突破口を宗教批判に求め、また宗教批判は政治批判の意味を持つ。急進的小市民フオイエルバッハの眼前に展開されたドイツは、かかる時代であり、従つてフオイエルバッハにとつては、「宗教は理論の對象となる前に實踐の對象であつた。」

かくて宗教批判は政治批判の意味を持つてくるのであり、ブルジョアのイデオログの新たな市民意識に映じたものは、この反動体制の支柱である既存の宗教を批判することであつた。ヘーゲル左派の代表者としてのフオイエルバツハの宗教批判は、正にかかる意識の下において行われ、従つてそれは明らかに三月前期のドイツ・專制政治批判の歴史の意味を持つてあろう。ここに序論で提起したドイツ・ブルジョア民主主義革命における急進的民主主義的小市民フオイエルバツハの宗教批判の歴史的課題も明らかになるはずである。その宗教批判はキリスト教神學および近代ドイツ思辨哲學がドイツ・スタトウス・タオーの支柱であることを暴露し、その綜合的體系者ヘーゲルもその例外、否、それこそ神學の近代合理主義における完成者であることを明らかにし、それが法皇を國王に轉置したにすぎぬことを指摘する。そしてヘーゲル哲學批判を轉機として、その根據たる理性を排除して、理性の自己疎外であつた自然あるいは物質の上に近代的人間像を築き、それを「新しい哲學」の基軸とするのでなければならぬ。かくてこそ「近代の課題」である「神の人間化」を完成することができ、それがとりもなおさず市民革命におけるブルジョアの課題を果しうることとなるであらう。¹²⁾

(1) 松田智雄「近代史的構造論」参照。ドイツ近代社會の發展形態の規定を「二つの途」の對抗關係から捉えておられる。

* K. Marx: Die deutsche Ideologie. M. E. S.S. 17—21.

(2) 江澤謙二「啓蒙的專制」思想 一三八號 ドイツの啓蒙主義・合理主義の觀念性と、その專制君主への妥協性について鋭い分析がある。

(3) 松田智雄「ドイツ觀念論の社會觀」——「現代社會思想の源流」に所載——一〇〇—一頁

ドイツ精神史の擔當者は、主として市民階級のうちでもその獨自性を持つ知識階級である。この階級は必ずしも經濟的條件に基礎付けられるものではないがドイツでは「イギリスの中産階級、すなわち興隆しゆく市民階級ではなく、社會の歴史的發展

からとり残された小市民の社會階層である。従つてこの階級はドイツ近代社會に特有なものであり「後進國では教養貴族に備
向し勝ちである。知識階級の二重性——進歩性と反動性——について、同書に詳細な敘述がある。

(4) 吉田信郎「三月前期におけるドイツ市民文學の素描」歴史學研究 第一三五號 四七頁

單に古典哲學だけでなく、古典文學についても同じことがいわれる。古典文學は三二年のゲーテの死を終焉として、急進的
共和主義的詩人ハイネへと批判的に解消される。

山下肇「變革期におけるドイツ文學」理論一九四九年六月號もこの立場である。

(5) エンゲルス「革命及び反革命」マル・エン選集 第四卷 上 五頁

エンゲルスは、ドイツ産業資本成長の遅れた理由を、一、世界通商公路からの地理的不利と、二、十六世紀以來の不斷の戦
いをあげている。同書六頁。

「三月革命に至るまで、ドイツ社會の資本の存在形態は、マニュファクチャー資本であり、地域的には……専ら西エルベに展
開する」松田 前掲書 九六頁

(6) F. Engels, *Feuerbach und der Ausgang der klassischen Philosophie*. 1888. 佐野文雄譯 岩波文庫 四〇頁

エンゲルスは「革命及び反革命」三五頁で次のように言つている「國教會という祝福をさすかつては國々や、政治上の論
議が束縛されている國々では、俗界の権力に對する現世的で危険な反對が、靈の專制に對する、より聖化された、そして一見
より非打算的な闘争のかげにかくされているということは、歴史上多數の實例がある。」

(7) F. Meining, *Die deutsche Geschichte*. 栗原佑譯「ドイツ社會文化史」二二九頁

ドイツ絶対主義と教權との結合はこうである「一八四五年のドイツの國々ではどこでも、ローマ・カトリック教がプロテス
タント教、あるいはその双方が國の法律の構成部分とみなされていた。どの國でもこの兩宗派の一方またはその双方の僧侶が、
政府の官僚機構の本質的部分になつていた。このような場合にあつては、プロテスタントまたはカトリックの正教を攻撃する
こと、僧權を攻撃することが、とりも直さず政府そのものをからめてから攻撃することであつた。」エンゲルス「革命及び反革
命」三六頁

(8) マルクス「ヘーゲル法哲學批判」マル・エン全集 一卷 四四〇頁

(9) L. Feuerbach, Brief an A. Ruge. V. 10. III. 1843.

伊達四郎「フオイエールバッハ」西哲叢書 三三三頁。伊達教授は、本書第十五章行爲とその制限と題して、フオイエールバッハの宗教批判の政治的實踐の意味について鋭い分析を進めておられる。

L. Feuerbach, *ibid.*

(11)(10)

古典主義の崩壊を始めとする既成思想體系の崩壊は、三月前期における危機意識の表現である。それは宗教的意識としては「ヘーゲル解體——左右兩派への分派——特にヘーゲル左派を中心とする宗教論争としてあらわれる。Straussの「イエス傳」——八三五年を導火線とする B. Bauer, A. Ruge, L. Feuerbach 等の宗教論争について詳論しなければ、この間の消息を具體的にできないが、これらについての問題は後に機會を見ても稿を起そう。その詳細に關しては、先にあげた。

F. Engels, L. Feuerbach u. Ausgang...Meinung, Die deutsche Gesch. K. Marr, Deutsche Ideologie. Heilige Familie. 本多講三

「現代」——「社會史的思想史」参照。一般的には T. Ziegler, Die geistige und sozialen Strömungen im 19 und 20 Jahrhundert. がある。

(12) フルジョニア民主主義革命における、殊にドイツ三月革命における小市民の役割は重要である。「この階級は、すべての近代國家、すべての近代革命でもっとも重要な階級であるが、ドイツではとりわけその重要性が大きく、ここではこの階級が最近の諸國争中に決定的な役割を演じた。エンゲルス「革命および反革命」八頁その具體的な關係は、後にその否定的性格を論ずるときに初めて明らかにするだらう。

Die Torthür des Glaubens.

Weshalb costet so viel Arbeit und Mühe der Glaube? Weil er dem Menschen nimmst, was nur zum Menschen ihn macht.

—— Feuerbach ——

三 「神學の秘密は人間學である。」

さきに觸れたように、ドイツのスタトゥス・クオは、フオイエールバッハにとつて正にあらゆる方面にわたつて

假象の支配している時代だつた。しかも當時は「學問が眞理に到達して眞理になるところでは、學問は科學たることを止めて警察の對象になる。」だが、國家權力を恐れて眞理を回避してはならない。あらゆる障礙を打破して、「眞理を虚偽から分かち」眞理を證示しようとする意志が、フオイエルバッハの宗教批判の根底を流れている。³⁾

宗教の眞理を明らかにするために、先づフオイエルバッハは宗教を人間の心像 *Bild* に即して心理的に解明する。信仰は有限なる個人の他者に對する態度であつて、他者を他者とすることは、理性的にも心理的にも必然的である。これは人間が動物とは異り、現實の有限なる個體として、自己の本質性——類 *Gattung* の意識を持つた存在であることから生ずる心理的に必然的な歸結である。⁴⁾ 従つて人間はこの類の意識によつて人間自身の本質を對象化し、これを絶對的の神と表象するところに信仰が成立する。「神學の祕密は人間學である。」という意味はこうであつた。「我々がギリシヤ語で *Theos*、ドイツ語で *Gott* と呼ぶ宗教の對象のなかには、人間の本質以外のなものも表明されていない。いいかえれば、人間の神は人間の神化された本質以外のものも表現されていない。従つて宗教史、あるいは同じことであるが神の歴史は、……人間の歴史以外のものでもない。」思辨神學はこの神の人間化を思想におきかえ、それを絶對的本質として表象しているにすぎない。しかもこのことを自覺しているのではなく、無知の上に信仰は成立している。従つてフオイエルバッハの人間學が、思辨神學に對する第一の批判は、宗教は哲學とは異つた領域を持つており、「信仰と理性との間には本質的な區別が存在している」ことを言明して、心理的・發生的に宗教を成立せしめる心理的根拠を示すことであつた。そしてこの心理的解明によつて人間學は、かの思辨のように、人間化の背後に特殊な超自然的祕密がひそんでいるかのような幻想を破壊する」ことであつた。⁵⁾ これを當時支配的であつたキリスト教神學について試みたのが「キリスト教の本質」

である。

先に述べたように、人間は心理的に自己の本質を對象化する。そしてキリスト教徒はこの自己の本質を神として絶對者として表象してしているにすぎない。神を不滅の本質とし、それを自己の對象に持つているものは、それ自身が不滅の本質なのである。「無限なる本質において、私に對し主語や本質として對象になるものは、單に私自身の述語や特性であるものにすぎない。無限なる本質とは、人間の無限性が人格化されたもの以外なものでもなく、神とは人間の神性または神性的性質が人格化され、一つの存在者として表現されたもの以外のなものでもない。」従つて「超物理學的で超越的な思辨哲學や宗教のいう意味では單に派生的なものの主觀的なもののまたは人間的なものの手段・機關の意義を持つてにすぎないものは、すべて眞理の意味においては根源的なものの、神的なるものの、本質・對象そのものの意義を持つてに⁹⁾いる。」かくしてキリスト教における神の愛は、人間の心情の對象化であり、人間の心情こそ根源的なものである。「化身の祕密は人間に對する神の愛の祕密である。しかるに神の愛の祕密は、人間が自己自身に對して持つてに¹⁰⁾いる愛の祕密である。」あるいは、エレミヤ記に見られる世界創造は、イスラエル人のためのものであり、それは「利己主義的な目的と感覺とを持つてに¹¹⁾いる。」つまり人間が神を世界の創造者となすのは、自分を世界の目的となし、世界の主人となさんがためである。このように神の意識が人間の自己意識にほかならないことは攝理の思想にもみられる。「攝理はこれらのことの最も反駁し難い、かつ最も顯著な證據である。神が人間をみるとは、人間が神のうちにもつばら自己自身をみるということである。神が人間のために配慮するとは、人間が自己自身のために配慮することが、人間の最高の本質であるということである。」¹²⁾他の場合には聞かせることを怖れる自己の祕やかな思いや願望を神に打ち明け、その實

現を信する祈禱においても、「これらの願望を充してやる本質とは、自分自身のことを聞いてやり、自己自身に同意し、異議も抗論もなしに自己を肯定するところの、人間的性情以外のなにものであろうか。」¹³⁾

私はここでフオイエルバツハに従つて、キリスト教の本質を體系的に敘述しようとするのではない。ただ人間は自分の本質を對象化し、そして再び自己を、かく主體や人格やへの轉化された本質の對象となす。これが宗教の祕密である。¹⁴⁾ ことを論證すれば足りる。フオイエルバツハはかくしてキリスト教の本質で、その心理學的方法によつて、思辨哲學やキリスト教神學が神として表象する絶對的本質は、實は人間の本質であるということを明示して、その假象性を暴露した。

だがこれだけでは、宗教は單に個人が心理的に他者を神として表現するといふその主觀的根據が、示されただけである。つまり神の本質は、人間の類の機能によつて對象化した自己自身の本質にすぎず、それを絶對者として表明しているにすぎぬということを明示しただけである。かくしては「近世の課題」である「神學の人間學への解消」は、これを指摘しただけであつて、具體的に人間の本質が何であるかが解明されなければならぬ。

すでに、フオイエルバツハは先の敘述にみられるように、人間の心情——自己に對する愛を對象化して、キリスト教の神の愛とし、人間の感性的本質を指摘している。「宗教は、ヘーゲルも主張することく、思辨的思惟の心情的幻想のみならず、思惟とは異なる要素を持つ。……この要素を我々は一言で以て感性 *Sinnlichkeit* と呼ぶことができる。何となれば心情も幻想もともにその根源は感性のなかにあるからである。」¹⁵⁾だがここにいう感性は、ヘーゲルの宗教哲學におけるそれとは異なる。なぜならヘーゲルの感性は單なる形式であるにすぎず、非本質的なものとして理性によつて止揚されるべきものでしかない。感性によつて表象せられた信仰内容は、哲學の

概念によつて止揚されなくてはならない。だが心理的に宗教の本質を明らかにするときは、感性は「單なる形式ではなくて、その形式の本質である。」ヘーゲル哲學で單なる形式とする感性こそ、宗教の本質である。そしてこの感性の母胎は、我々が心理的發生的に、なにもものによつても紛飾されない自然宗教に照すとき、明らかに自然であるということが分るであろう。我々の感官にとつて第一の對象であり、また感官が依存するものは自然である。自然とは「本源的な、最初の、窮局の本質である。」¹⁹⁾宗教におけるこの自然と感性との意味および兩者の關係については後に詳論されなければならない。いまは感性的本質が人間の本質であるということ、従つてこれによつて成立する信仰内容を理性によつて概念化することは、正しい宗教批判にならないことを明らかにすればよい。とすれば、ここでフオイエルバッハは、ヘーゲルと決定的に分れるべき運命をもつていることが知れるであろう。すなわちヘーゲルの理性もそれが神的なるものである限り、自己のうち感性を攝取し、それによつて信仰内容を成立せしめるが、それはやがて單なる形式として理性によつて止揚されるとすれば、やはりそれは「神の人間化」を「神の理性」への解消することと何ら異なるものではないではないか。フオイエルバッハの批判は、今やヘーゲルの理性そのものに向けられねばならない。

(1) J. Feuerbach, Das Wesen des Christentums. Vorrede zur zweiten Auflage. 1843. S. W. VI. 船山信一譯 岩波文庫上二
六頁

「假象が現代の本質である。我々の政治も假象であり、我々の科學も假象である。今は、眞理を語る者は厚顔であり、不作法である」とされ、不作法であるものは不道徳とされる。眞理は我々の時代にとつては不道徳である。」

なお、小論で取扱うフオイエルバッハは主として Das Wesen des Christentums. 1841. 以後、すなわち所謂後期の思想である。従つてその思想形成の過程を明らかにすることができず、勢い斷面的な相を描くに止まるが、これに關する詳論は伊達

教授の前掲書を參考せられたる。

- (5) L. Feuerbach, *ibid.* 船山譯上 二八頁
 フカイエルスマンは、すでにその匿名論文 Gedanken über Tod und Unsterblichkeit. (Todesgedanken) 1830, mit einem Anfang, Schrifttheologische Studien. — 冒頭であげた諷刺詩をそのうまのしつである——のなかでの現存宗教の攻撃によつてあらゆる大學を迫られた。「この著作は當時の反動および上から監視された信仰の時代において、一つの官職をえんとするフカイエルスマンのあらゆる試みに對して、しつもまたどこにもなくとも障礙となつた。」
 F. Jodl, *Indwich.* Feuerbach. S. 121 北村譯 四頁 フカイエルスマンの生涯によつては本書に詳し。
- (3) L. Feuerbach, *ibid.* S. 326. 船山譯上 一四四頁
- (4) L. Feuerbach, *ibid.* S. 1. 船山譯上 五六頁
- (5) L. Feuerbach, *Vorlesungen über das Wesen der Religion.* S. W. VIII. S. 21.
 母體教授「フカイエルスマン」宗教論 一九二頁以下參照
- (7) L. Feuerbach, Das Wesen des Christentums. S. 63. 船山譯上 一三九頁
 フカイエルスマンのこの點によつてのすべれた分析は、本多謙三氏の前掲書のほかに「フカイエルスマンのヘーゲル批判」——「實存哲學と唯物辯證法」がある。
- (8) L. Feuerbach, *ibid.* S. 336. 船山譯上 一五九頁
- (9) L. Feuerbach, *ibid.* S. 11. 船山譯上 六九頁
- (10) L. Feuerbach, *ibid.* S. 319. 船山譯上 一八五頁
- (11) L. Feuerbach, *ibid.* S. 359. 船山譯上 二〇六頁
- (12) L. Feuerbach, *ibid.* S. 363. 船山譯上 二一四頁
- (13) L. Feuerbach, *ibid.* S. 149. 船山譯上 二五二頁
- (14) L. Feuerbach, *ibid.* S. 37. 船山譯上 一〇四頁
- (15) L. Feuerbach, *Vorlesungen über das Wesen der Religion.* S. W. VIII. S. 16.

(16) L. Feuerbach, *ibid.*, W. VIII, S. 104.

四 ヘーゲル宗教哲學批判

ヘーゲル哲學はドイツ觀念論哲學の傳統である理性の立場に立つて、自然あるいは物質を自己のうちに攝取し、「近世哲學の完成者」として「神の人間化」の課題を果した。この點は單なる思辨哲學と異なるヘーゲルの積極面であり、彼が批判的たりえた所以であろう。すなわちヘーゲルにおいて、人間にとつて彼岸的であつた超越的・絶對的な神は、有限的・感性的人間の物質的世界に引きずり下され、自己をこの此岸の世界に否定する。だがヘーゲルにおける神は絶對的精神としてそのうちに辯證法的に展開するイデーである。従つてイデーにとつてその特殊性でしかない物質は、再び否定せられ具體的普遍としての絶對的精神となる。物質の側からすれば、「物質は精神の自己疎外でしかない。かくして物質そのものは精神と悟性とを得て、絶對的本質のうちへ、このものの生、形成の、展開としての契機として採りあげられる。だが、同時に物質は再び、ひとつの虚無な、眞實ならぬ本質として定立されてしまつている。」従つてヘーゲルにおける物質的自然——その基底に立ち、その一部としての感性的存在としての現實的人間をも含めて——は、絶對的本質ではなく、本質的ならぬものでしかなく、現存する人間をその眞實の姿において捉ええない。従つて「近世の課題」である「神の現實化・人間化」は、神のイデーへの解消でしかない。要するに物質を媒介として、神は再びその本質たるイデーの具體的普遍に安らうこととなる。「神學の否定は、従つて、再び否定される。言いかえれば、神學は哲學によつて再生産される。神は物質、神の否定を克服し、否定することによつて、はじめて神である。そして否定の否定こそは、ヘーゲルによれ

ば眞の肯定である。」これはすでにその青年時代において「愛における運命との宥和」——ギリシヤ精神とキリスト教の統一——を自己の生涯の課題として出發せるヘーゲルの辿りつくべき到達點であると共に、その具體的な論理構造の證示でもあつた。かくしてキリスト教はイデーとして解消せられ、啓蒙思想とキリスト教との近代的統一が完成される。「ヘーゲル哲學は、失われ、没落したキリスト教を哲學によつて復興せんとする、しかも一般に近世においてそうであるように、キリスト教の否定がキリスト教そのものと同一視されるということによる、最後の雄大な企圖である。」ところで「神學の立場における神學の否定」でしかないこの「ヘーゲル哲學は、神學の最後の逃げ場、最後の合理的な支柱である。嘗てカトリックの神學者達がプロテスタンティズムと戦いうるために、事實上、アリストテレス派となつた如く、今やプロテスタントの神學者達は、無神論と戦いうるためには、當然、ヘーゲル派とならねばならない。」なるほど、「近代の課題」である「神の人間化」を完成すべく、ヘーゲルは物質的自然をばイデーの綜合體系のなかに攝取した。しかもこれによつて神を積極的に否定した。ここにヘーゲル辯證法の構造の否定的契機がみられ、その進歩的役割も存在する。だがすでに明らかにせられたように、物質はイデーの自己疎外として、非本質的なものの根源的な有限なるものとしてであつた。従つてその端初において神の本質としてのイデーによつて、神は合理的基础付けを與えられた。この點において何らヘーゲルの宗教哲學は思辨的神學と異なるものではないといえよう。かくてヘーゲルの宗教哲學は、當時、ドイツのスタートゥス・クオ[status quo]——メッテルニヒツと體制——のイデオロギー的支柱であつたキリスト教神學を破ることは出来ない。そのみか、合理主義ないしは啓蒙主義を媒介とする神學の肯定であつたために、却つて當時ブルジョアの自由主義的思想の擡頭を抑壓するために、絶好な武器をドイツ絶對主義に與えることとなつた。

ヘーゲルを超えぬ限り、ドイツ・スタトウス・クオを破つて、ドイツ市民革命の理論的武器となることはできない。「新しい哲學」は、市民革命におけるブルジョアジーの課題を果すために、キリスト教神學は勿論、さらにその合理的支柱であるヘーゲル哲學の限界を破つて、「神學の人間學の完全な・絶對的な・矛盾のない解消」を果さなければならぬ。「ヘーゲル哲學を廢棄しないものは、神學を廢棄しない。自然、實在はイデーによつて定立されるというヘーゲルの教説は、自然が神によつて、物質的本質がひとつの非物質的な、すなわち抽象的な本質によつて創造された、という神學の教説の合理的な表現にすぎない。」ヘーゲルの自己内還歸のイデーも一つの特殊な前提である。イデーにおいて自己否定的なもの、有限なるもの、物質的なものは、イデーより導出されたものではなくて、根源的なものである。従つて「哲學の始元は神ではない、絶對者ではない。絶對者あるいはイデーという客語としての存在ではない。——哲學の始元は有限なるもの、限定されたもの、現實的なものである。」かくて、フォイエエルバッハにとつて、「新しい哲學は、人間を、人間の土臺としての自然をも含めて、哲學の唯一の・普通の・最高の對象となる。」

(1) L. Feuerbach, Grundsätze der Philosophie der Zukunft, S. W. II, SS. 275—7.

(2) W. Dilthey, Die Tugendgeschichte Hegels, G. W. IV.

「ギムナジウムに入つてからはギリシヤ思想、チェーピンゲン修學時代以來はキリスト教、これを過去の二つの巨大なる歴史的な力として、そこに沈澱し、それを解剖することこそ、この客觀的精神にとつてふさわしい道程であり、これが彼の歴史的世界觀への糸口となつた。」

(4) L. Feuerbach, *ibid.* S. 277.

(5) L. Feuerbach, *ibid.* S. 265.

「近世哲學、特に汎神論の、それが神學の立場における神學の否定、あるいは神學の否定ではあるがこの否定自身がまた神學であるという矛盾、この矛盾はとりわけヘーゲル哲學を特色付けるものである。」

(6) 拙著「ヘーゲル市民社會思想の基本的構造」經濟論叢 第六十六卷 四號

(7) エンゲルス「ドイツのスタトゥス・クオー」マル・エン選集 第一卷 上 二二八頁以下

「ドイツのスタトゥス・クオー」とは、「ドイツの遅れた状態をさし、またかかる状態によつて生み出され、かつそれを維持している古い支配勢力・絶対主義勢力・はやくいへば半封建的なドイツの諸政府をさす。」

伊藤新一氏の註に依る。同書二五二頁

(8) 本多謙三「社會史的思想史」の「現代」の部 二五六—七頁

「ヘーゲルは、主観的な、客観的な存在の統一、即而向自なる存在者を社會的倫理性 *Stützekeit* のうちにみた。これこそ彼の究極的な實在であつた。ところが彼において *Stützekeit* とは國家の絶対權力を、そして結局はプロシヤ國家の絶対權力を意味するものにほかならなかつたのである。彼の超悟的な合理性の主張はブルジョアの合理性の超克であるとともに、單なるそれへの反動としてのロマン的非合理主義の征服でもあり、従つて新たな世界への豫見をもつものではあるが、彼の現實的行動はついに保守的結着を遺してしまつた。」この點については、先にあげた拙著において不十分ながら市民社會思想について分析しておいた。

なお、ヘーゲル後期における彼の現實的行動の反動性に關して Dilthey の優れた敘述がある。ヘーゲルはプロイセン政府の首相 Altenstein 文相 Schulze に近付き、反動政府の利用するところとなつた。「……ヘーゲルはこういう瞬間に到達した。それは、プロイセンの内に作用する、諸力の價值についての歴史的意識を強調すべき時期である。丁度一八一七年十月十八日 Wartburgfest が行われた。アルタンシュタインは青年が政治およびその不定な理想に加盟することを阻止しようとした。最初から彼はヘーゲルを目して、彼の世情の圖表した知識を以てすれば、このことを果しうる人物と認めた。」

W. Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Bd. IV, Hegels Berliner Periode, Ss. 256—7.

L. Feuerbach, *Vorläufige Thesen*, S. W. II, S. 289.

(10) (9) L. Feuerbach, *Zur Kritik der Hegelschen Philosophie*, 1839, S. W. II.

フオイエルバッハと市民革命 (一)

第六十九卷 一三九 第三・四號 四〇

(11) F. Feuerbach, Vorläufige Thesen, S. W. II, S. 230.

伊達教授「上掲書」二四八頁

(12) F. Feuerbach, Philosophie der Zukunft, S. W. II, S. 317.

(未完)

(本稿は昭和二十六年度文部省科学研究費による共同研究の一部として書かれたものである。)

經濟論叢既刊目次

第六十八卷 第一・二・三號

(昭和廿六年九月發行)

商業資本に關する一考察……………松井 溥

ロバートソンの景氣理論……………伊藤 史朗

變動過程の乗數分析……………市村 眞一

社會政策における「政治」と「經濟」……………岸本英太郎

ヴェブレンの資本主義論……………松尾 博

第六十八卷 第四・五號

(昭和廿六年十一月發行)

鐵鋼業研究特集

鐵鋼業の共同研究について……………島 恭彦

鐵鋼業に於ける勞働力構成……………鐵鋼業共同研究勞働班

鐵鋼業に於ける流通機構の分析……………鈴木 重晴

鐵鋼補給金に關する一考察……………廣田 司朗